怡与造と林太郎 そして源太郎のクラウゼヴィッツ

細野 哲弘
独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
（元 特許庁長官　元資源エネルギー庁長官）

今後数稿に亘り、日露戦争を題材にしてみたい。ことの始まりは、司馬遼太郎の「坂の上の雲」である。「何を今更」という感じではあるが、実は最近別の目的で彼の「歴史の中の邂逅 7」（中公文庫）を読んでいて、「坂の上の雲」には各巻毎に「あとがき」があること、4巻目のそれに日露戦争時の陸軍参謀本部次長である田村怡与造なる人物が紹介されていることを、偶々「発見」したのが発端。

筆者が単行本でこれを読んだのは大学生の頃。全部で6巻まであった大著を3週間ほどで読破している。改めて本箱の奥から取り出して手に取ってみた。若気の至りで筋を追うことに急なあまり、内容を十分含味しない当時の読み方のせいもあって、これまでその人物名に記憶はなかった。しかし、確かに4巻の「あとがき」に彼についての記述がある。

司馬遼太郎は「坂の上の雲」で実にたくさんのことを書き記しているが、陸軍については、二〇三高地攻略を巡っての乃木と伊地知の作戦・指揮の不味さや藩閥人事など、反実力主義の弊害を浮き彫りにした記述の方が目立つ。彼はそこに、のちの太平洋戦争における軍部の宿痾ともいうべき構造的機能不全の前兆を見ており、明るいはずの「坂の上の雲」に暗い影を落としている。しかし、極東の新興小国日本が、いかにその内部に革命含みの亀裂があったとはいえ大国中の大国であるロシアを相手に戦いを挑むに当たって、「陸軍的にも勝算のある戦略」を持っていなかったはずはなく、その部分についての彼の筆致は冷淡であるとの印象がある。田村怡与造についても、本文では触れていない。

どうも回りくどいイントロになった。日露戦争のヒーローというと、海軍では東郷平八郎、秋山真之であり、陸軍では大山巌、児玉源太郎などであるが、バルチック艦隊を殲滅した日本海海戦のインパクトのせいか、どちらかというと海軍の勲の方が華々しく記憶に残る。「坂の上の雲」でもそうした印象が残る書き方がなされているし、陸軍の戦い方には、乃木希典などに対するものも含め辛口の記述が多い気がする。その海戦勝利の意義を讃えるのは良いとしても、一歩引いてこの戦争を見ると、戦勝後に賠償金が取れなかったことなどに象徴されるように、国家間の戦争としては日本の辛勝に過ぎなかった。

そのことを思うと、当時の我が国の国家としての対露戦略は、陸軍も含めてもう少し「全体的な戦争設計」という観点から仔細に見ないといけないのではなかろうか。戦争設計というのは、軍事だけでなく、政治、外交その他を含めた総合的なものである。これよりいくつかの側面から見ていくつもりであるが、その最初である本稿は、司馬遼太郎がその大作で誌面を多く割かなかった田村怡与造なる人物を通じて、当時の国の戦略の立て方の一端を考察してみたい。

田村怡与造像（笛吹市・中尾神社宮司で田村宗家の田村弘正氏のご厚意で頂戴した）

明治新政府が軍制を整えるに手本としたのは、海軍は英国、陸軍は仏国であった。ところが、その手本と見習うはずだった仏国が普仏戦争でプロイセン（ドイツ）に負けてしまうのを目の当たりにした視察団は、敢然として陸軍の手本をドイツに切り替える決断をする。政府は新体制になって間もない時期に、首脳を挙って海外視察に出している。1871年（明治4年）から2年間に亘り、正使岩倉具視、副使大久保利通はじめ、木戸孝允、伊藤博文など内閣の半数を超える陣容で視察団を派遣している。維新後の政権が出来たばっかりの駆け出しの時期で、かつのちに西南の役の端緒になる国内問題が燻る中で、「よくぞまあ」と思う。しかし、国づくりの青写真がないまま政権を奪取した勢力としては、寧ろ何をおいても先ず国の骨格を早く制定したいとの思いでの外遊であっただろう。

普仏戦争の帰趨を見定め、プロイセン国王のウィルヘルム一世、宰相ビスマルクに接した視察団一行、とりわけ大久保利通、伊藤博文は、次のような彼らの弁舌に圧倒され、その理念、国柄こそ我が国情に照らして相応しいと、殆んど心酔ともいうほどの強い感銘を受けた。曰く、

「世界の列強は表面上儀礼を以て交際をしているが、内実は弱肉強食の世界である。万国公法などは一応の秩序維持のために存在するが、それは自国に理があるときだけ援用され、不利と見れば平気で武力に訴える。こうした国際社会で小国が自らの国権、自主性を保持していくには、君主の下で一丸となって軍事力を高めないといけない。英仏など強国は植民地を擁し、兵威を恣にし、諸国はその行動に苦慮している。」と。

政治体制のドイツ傾倒と並行し、時期は若干前後するが、既に1870年頃から観戦武官として派遣された山縣有朋、大山巌等陸軍首脳においてもドイツの強さが注目され、加えて桂太郎[1)]、川上操六らの中堅将校においてもドイツ式への転換志向が高まった。しかし、仏国式の訓練を受けた軍人は多く、軍制の転換は生易しいものではなかった。例えば、西南の役で熊本城を死守し西郷軍を薩摩に追い返した谷干城、あるいは三浦梧楼なども仏国派で、彼らは退役後貴族院議員に転じたあとも、軍制切替えを断行した陸軍首脳に終生批判的な政治姿勢を貫いた。

他方、それまで主流であり自らも仏国式の教育を受けた中堅士官には、事態の推移を冷静に見て、ドイツ流へ共感を示すものも少なからず存在した。明治12年に定められた陸軍幕僚参謀条例により最初の参謀科将校となった小坂千尋（のちの軍務局軍事第一課長）は、その自らの仏国留学の経歴にかかわらず、熊本の連隊勤務を経て東京に戻った田村怡与造にドイツ留学を勧め、ドイツ派の桂太郎や山縣有朋などに進言の労を取っている。田村怡与造は、結果二度に亘ってドイツに留学、勤務をし、ドイツ流の軍略に馴染み、本稿の主題である国家戦略の立役者になっていく。

田村怡与造は山梨県の出身。一族は、平安末期からの武蔵七党の一つである武士団に属し、甲斐に移ってより武田信虎（信玄の父）に仕え、武田滅亡後は徳川家のもとで神官として家系を繋いでいる。江戸期以降は、幕府直参の格式を有する延喜式内社である中尾神社を主宰し、名字帯刀を許され、明治になっても士族の家柄である。怡与造はその家系の跡取りとなるべき長男坊として生まれている。元々

中尾神社の境内（山梨県笛吹市：田村怡与造生家であり、中尾神社の社号標は怡与造によって建立されたもの。またその右奥の「日露戦役記念碑」には大山巌の名が刻まれている。

1) 桂太郎は川上操六とは、当時の陸軍にあって将来を嘱望される中堅将校仲間であった。戦略に長ずる川上に対し、桂は早くから軍政を志向した。陸軍大臣から主要大臣を経て、首相への道を辿ったのは、周知のとおりである。

武門の流れを組む血脈のせいか、幕末の動乱において怡与造は15歳にして勤皇派の隊に参加するなどしている。維新後、怡与造は若年ながら地元の小学校の教諭、校長を歴任していたが、そののち創設間もない陸軍士官学校の二期生に応募している。

やや先を急いだ記述となったが、士官学校入学に至るまでの経緯は決して平坦ではなかった。彼は、士官学校生徒募集を県庁からの回覧で知るや「血の騒ぎに耐えかねて」、実家の許し、関係者の了解を得ることなく、校長職を放擲（ほうりだ）し、出奔、上京してしまう。「相談すれば反対される。」との判断からの覚悟の行動であったが、神官であり、裂帛（れっぱく）の刀匠でもあって、土地の名望家の当主である父義事（よしこと）がこれを許すはずもなく、怡与造は田村家を勘当されている。彼はその後仕方なく校長時代に妻に迎えた伝子の実家の姓である早川を名乗る時期が長かった。この時、妻伝子は「お金はなんとか致しますから、思う道に進んでください」と背中を押したと伝えられる。

なお、一族は明治から昭和にかけて、怡与造を筆頭に陸軍中将を4人輩出している[2)]。

田村家四将軍顕彰碑（山梨県笛吹市：中尾神社）

ドイツの軍制というと、真っ先に思い浮かぶのがモルトケにより確立されたドイツ参謀本部である。その要諦（ポイント）は、軍政から独立した参謀本部が軍の編成大権を駆使して作戦、動員などの軍運用の根幹を掌握し、各軍団、師団に置いた参謀（参謀長）をして系統的に軍団長、師団長を補佐させるということにある。その思想の根幹は、クラウゼヴィッツの「戦争論」に依拠している。18世紀終わりから19世紀初頭の欧州はナポレオンの全盛期。そのナポレオンがロシアに侵攻するも、補給線の伸び切ったところで「冬将軍」に苛（さいな）まれ滅亡の道を辿った経緯から、クラウゼヴィッツは「補給、後方支援の重要性」を認識し、その戦略思想を盛り込んで「戦争論」を表した。意外な感じがするが、ナポレオンの時代までは、兵糧などは現地調達が当然で、兵站（へいたん）という思想は普遍的でなかった。また、どんな天才であっても一人の能力には限界があり、個人の限界を克服するためには、戦略思考のできる参謀を駆使して軍組織全体として機能する仕組みとすることが志向された。

一方、ナポレオン戦の経験はロシアにも重大な示唆を及ぼした。「撤退を続けながら敵を国内奥深く引き寄せ、敵の補給線が伸びたところで反転攻勢に出る」という戦略は、以後ロシアの伝統的戦略にもなった。日露戦争において、満州国司令官クロポトキンがまさにこの作戦を意図するのであるが、これは後程触れる。

やや話が前後するが、陸軍は1884年（明治17年）に大山陸軍大臣を団長に三浦梧楼中将、野津道貫少将、桂太郎大佐、川上操六大佐などで構成される兵制使節団を欧州に派遣している。その滞在中、大山はドイツの陸軍大臣にドイツ教官の日本陸軍大学校への派遣を要請した。その結果、招聘（しょうへい）されたのが、メッケル少佐[3)]である。彼はドイツ陸軍大学在学中

2) 長男の怡与造のほか、六男の沖之甫、七男の守衛、さらに三男の息子（即ち彼らの甥）である義富である。怡与造以下の三兄弟は日露戦争に関わり、義富は太平洋戦争に関わった（グアム島にて戦死）。田村宗家は今も中尾神社を守っておられる。

3) 筆者は、実はこのメッケル少佐の甥っ子さんの息子さん（メッケル少佐の弟さんのお孫さん）を存じ上げている。90年代の中頃にドイツの日本大使館に赴任した折、筆者は経済担当ではあったが、確か広報文化関係の行事でアンドレアス・メッケルさんを紹介されて2度ほどご一緒した記憶がある。今はもう引退されたと思うが、当時は眼鏡をかけた髭の壮年で、独日経済振興公社の一員として活躍され，大使館とも連携してドイツにおける対日報道・論調，特にＴＶやラジオにおける日本関連報道や論調をフォローして頂いていた。
　メッケル少佐は、帰国後ドイツ陸軍に復帰して少将まで累進しその後退役されているが、ドイツ帰国後の詳細の事情は承知しない。筆者はといえば、ドイツ在勤当時「あのメッケルさんの係累（しそん）だ！」と興奮して、アンドレアスさんとは専ら日清戦争当時の軍事教育の話ばかりして、それ以外の会話をした覚えがない。後に同僚から「メッケル将軍には、帰国後になかなかのロマンスストーリーがあったんですよ」と聞かされたが、そのままになってしまった。

から多くの論文を著し、「戦時帥兵術」は20カ国で出版されるほどの名声を得ていた。とりわけ「独逸基本戦術」は日本の陸軍大学生への教科書として使われ、その簡明にして実践的な操典は大学校生徒に多大な影響を与え、日清戦勝はメッケル戦術の賜物と言わしめた。

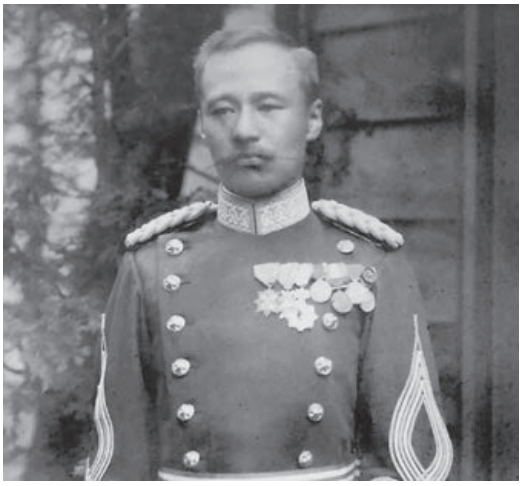
当時、田村（当時はまだ早川姓を名乗っていた）はベルリン軍事大学に留学中であり、視察団一行の接遇に当たった。しかし、その後も続くドイツでの留学中、欧州の事情に深く接するにつれ、「メッケル戦術は有用なるも、従来の軍隊だけの戦術では限界があり、これからの戦争は全国民を挙げての国家対国家の総力戦になる」との想いが募り、より戦略思考の高い構えの対応が不可欠であるとの感を強くした。

その時出会ったのが、クラウゼヴィッツ[4]の「戦争論」であった。「後方支援、兵站機能の重視」、「予め十分な布陣を整えてから戦力を集中投入する思考法」、更には「戦争とは他の手段をもって行う政治の継続である」とする基本認識は、田村の焦眉の問題意識にマッチした。特に、「戦争は政治の一部である」という戦争観は近代の総力戦の原点であり、その点で「戦争論」は以前のものと明確に画（くべつ）される。

しかし、問題があった。クラウゼヴィッツの著書の肝（きも）は、ドイツ観念論や弁証法の方法論に色濃く影響された「戦うための哲学」であり、その解読には大変な困難が伴った。そこに一つの出会いがある。田村は彼に先んじてベルリンに医学留学中であり、ドイツ語に強い森林太郎に「戦争論」の解読講義を依頼したのである。林太郎の鋭敏な哲学センスと語学力は難解なドイツ戦略論へのアプローチに不可欠であった。この森林太郎こそ、のちの文豪森鷗外である。

二人の因縁はこれで終わらない。のちに二人は帰国し、各々の道に進むのであるが、小倉第12師団軍医に赴任した森林太郎にクラウゼヴィッツの「戦争論」を早急に翻訳すべしとの依頼が届く。依頼主は、参謀本部に復帰した田村であった。田村がドイツ留学していた明治20年前後の時期は、「戦争論」の重要性に目覚めてはいたものの、時局としては仮想敵国は中国（清）に留まっていた。しかし、流石（さすが）に30年代になるとロシアとの戦争は不可避の状況になり、陸軍首脳、参謀本部では、全ての参謀をより高次元の思想で再教育しないと大国ロシアには対抗できないと判断するようになった。その材料にクラウゼヴィッツの「戦争論」を採用したものの、田村がドイツ時代に難渋（てこずった）したのと同じ「難解すぎて手に負えない」問題に直面した。そこに至る迄に、陸軍士官学校でもその重要性に着目して翻訳に着手していたものの、難解ゆえに中断したままになっていた。

森林太郎（鴎外）像
（東京文京区：森鴎外記念館入口のレリーフ）



森林太郎像（小倉赴任の頃と伝えられる）

4）クラウゼヴィッツは、18世紀後半から19世紀前半のプロシア王国の軍人である。プロイセンの軍制改革の先駆者であるシャルンホルストに師事し、陸軍大学校長（少将）として勤務した折、それまでのフランスなどとの実戦を経て得た知見をもとに、「戦争論」を執筆し始めた。彼は1831年に心臓マヒで死去したが、その原稿は「戦争及び戦争指導に関するカール・フォン・クラウゼヴィッツ将軍の遺稿」として、未亡人マリーによって出版された。

そこで再度小倉の森林太郎に白羽の矢が当たることになる。その頃、森は、師団長井上光[5]の勧めに応じ、ポツリポツリと師団の将校にクラウゼヴィッツの講義をしていたのだが、参謀本部田村からの依頼により、他の師団の参謀にも均霑するよう、本格的に翻訳に取り組んだ。彼は師団軍医の業務の傍ら、週二回の頻度で、彼が口述翻訳する「戦争論」を同僚で語学に強い大庭大尉に筆記させるという作業を続けた。その成果、とりわけ第1、第2巻の戦争哲学部分は、ガリ版刷りで全国13師団の参謀長、参謀に配布され、熟読されたという[6]。

この森林太郎の小倉赴任には、文学界も含めて面白い論争がある。

彼は大山巌第2軍の下で日清戦争にも従軍し、戦後は軍医学校長に陸軍大学校教授を兼ね、明治31年近衛師団軍医部長に補されている。ところが、それから間も無く、新設の小倉第12師団軍医部長の発令を受けたのであるが、これがそれまでの順調な累進コースに照らして想定外であったことから、各方面に物議を醸すことになった。

自負心に溢れ、ゆくゆくは軍医総監たるを志向していた森自身もこの発令に酷く落胆し、一時は本気で辞職を考えるほどであった。この「左遷発令」は、彼の文学、美術など多方面の活躍に対して、軍医仲間に羨望とともに根強い嫉妬の念があったことが原因とする説が有力である。事実、当時の彼は雑誌「めさまし草」を創刊し、評論、創作の文筆活動を手広く展開していた。更に、彼の大学同期の小池正直医務局長が軍医として彼をライバル視して、医官としての職務怠慢を名目に彼を遠ざけたという見方もされている。

これに対して、「これは左遷にあらず」との説がある。参謀本部の総務部長に就任した田村が、当時喫緊の課題であったクラウゼヴィッツ「戦争論」の翻訳を急がせるため、東京では多方面に繁忙な森を、「手を回して」敢えて時間に余裕のある九州に異動させたというものである。本稿の趣旨から言うと大層面白い仮説であるが、筆者としてはやや疑問に思う。当時大佐から少将になったばかりの田村が、いかに飛ぶ鳥を落とす勢いの参謀本部の意向とはいえ、畑違いの医官人事でしかも既に少将格であった森の異動にまで容喙できたとするのは穿ち過ぎではなかろうか。

また、小倉における森の文筆、講演などの活動は東京時代よりも寧ろ活発化しており、要するに東京に居ては翻訳ができないとして異動させたというのは、森の能吏さ、多才さへの勘違的侮辱でもある。

話を戻そう。

クラウゼヴィッツの戦略論についてである。その本質の理解には二つの誤解がある。我が国では、これに基づく参謀本部の独立性の故に、のちにこれを導入した日本陸軍の統帥権解釈の元凶になったというコンテクストで語られる。具体的には、ひとつは現場指揮官の独断の許容、もうひとつは統帥権の独立である。確かに、彼の立論は、軍政と切り離して、戦略策定、運用における参謀本部と参謀の優位性を際立たせたものであるのは事実。

しかし、戦略における参謀本部の指示は尊重されるにしても、現場の指揮官による戦術の判断は臨機

クラウゼヴィッツ像（ウィキペディアより）

5) 井上光・師団長は、旧岩国藩の出身。日清戦争において第２軍の参謀長を務め、同じく軍医として従軍した森林太郎とは陣営での旧知であっただけでなく、戦略家としてクラウゼヴィッツの「戦争論」の重要性が分かる人であった。日露戦争後、陸軍大将に補されている。

6)「戦争論」の第３巻以降は比較的平易な用兵部分であり、士官学校翻訳が使用されたようだが、フランス語訳経由の和訳のせいか理解のし易さには問題があったとされる。

応変であるべきは当然である。まさに「事件は現場で起きている」からである。

更に、統帥権は軍政との区分において参謀本部の作戦専門性を意味しているに過ぎず、軍政を超越するとか、内閣の政治判断に優位するものでは決してないことは、当時のドイツ政治家、軍人においても明らかすぎるほどに認識されていた。即ち、「軍事は政治又は外交の一部であり、政治、外交の大きな判断を凌駕する軍事はありえない。」ということである。

要は、昭和陸軍の問題は、これを運用する側の意図的な壟断曲解のなせるものであり、制度そのものの帰結ではないということである。尤も、完璧な制度というものはないから、不測の解釈などがなされないよう入念に制度設計の工夫を施すことが大切であるが、それが容易でないことは、洋の東西を問わず歴史が示している[7)]。

田村は、ベルリン大学でのドイツで参謀学、ザクセン連隊勤務での実戦勤務、更には各国情勢の研究を経て、1888年（明治21年）監軍部参謀として復帰し、少佐に昇格。日清戦争では山縣第1軍の参謀副長として従軍。その後再度ドイツ公使館付き武官（中佐）として赴任し、約1年半かけて最新の欧州事情を把握した後、参謀本部に復帰した（1898年）。更に翌1899年に作戦全般を司る参謀本部第一部長、1900年には参謀本部の人事を含めた統括をする総務部長に就任し、少将に昇格している。

この間、参謀本部は激震に見舞われている。日清戦争の立役者で、さて次は日露戦争へという段になって、参謀総長であった川上操六大将[8)]が急逝（52歳）したのである。参謀としての彼の後継者は衆目の一致するところ田村であった。川上も山梨出身の田村を「今信玄」と呼んで可愛がった。しかし、いきなり川上の後継に据えるには少し年次巡りが悪く、参謀総長には大山巌、参謀次長には寺内正毅という布陣でしのぎ、1902年寺内の転出の後を襲う形で田村が参謀次長に昇格している。

その一連の期間に田村が参謀本部で成したのは、ロシアという強大な国の状況を冷静に見据えて、まさにクラウゼヴィッツの戦争哲学を日本陸軍の操典に体現化（embody）するということであった。

まず、「兵站、後方支援機能の充実」である。軍の用兵実務及び後方支援、兵站業務の基本である「野外勤務令」、「歩兵操典」、更に「輜重兵操典」を矢継ぎ早に整備した。特に「輜重兵操典」は、それまで顧みられなかった「軍需物資の確実な輸送」を行うための実務運用指針となった。その延長で、集結地への迅速な輸送のための鉄道網の整備と官民の鉄道会社が遵守すべき「鉄道軍事要務令」の制定をなしている。鉄道会議の議長をも務めた。加えて、膨大な消費が想定される弾薬を生産する国内工場（とりわけ大阪工廠）の生産計画にも目を配った。

そして、何よりも重視したのが、「周到な事前準備の上での兵力の集中投下」の観点から、「主戦場」と戦端を開く「タイミング」の見定めであった。緒戦においてロシア軍を凌駕する兵力を仮想戦場に迅速に集結させることを旨として入念なプログラムを用意した。ときに、ロシアはシベリア鉄道を整備して鉄道による兵力の東方輸送を充実させんとしていた。「その鉄道網が完成し極東に達するより前に、事を起こすこと」、「兵は仁川から上陸させ、真っしぐらに最終決戦場と想定する奉天に向かわせること」が画された。なお、当初の想定では陸上戦闘が主眼で、旅順は等閑視されていた。それがバルチック艦隊の回航の知らせにより一大戦略変更が行われている。それに伴い、想定になかった第三軍の編成とそれへの乃木と伊地知の登用がなされることにな

7) 統帥権問題は、我が国においては太平洋戦争における軍部の越権的暴走の元凶として語られることが多いが、その規定は明治憲法に明文があり、その弊の端緒は日清戦争においても既に現われている。川上操六は、参謀として当時の清国の実力を見切り、渋る内閣を押し切って開戦に持ち込むに当たり、統帥権条項をたてにした。元来シビリアンコントロールの意義を分かっていた伊藤博文は、ドイツの制度に共鳴し、その効果を十全にするため良かれと思って統帥権を明文化したのだが、日清開戦に当たっての陸軍の態度に接して、臍（ほぞ）を噛（か）んだとされる。

8) 川上操六は参謀としては田村の師匠格の人物。日露戦争を主題とする本稿では敢えて詳細の紹介を省くが、ドイツでの兵学研究の経験もあり、言わば「日露戦争における田村の日清戦争版」というべき存在。桂太郎とは早くから軍政、軍略の分担で陸軍を支えたことは、前に触れた。薩摩出身ではあるが、藩閥的なところはなく実力主義で分け隔てなく若手を指導し、我が国参謀本部の基盤を築いた。「日清戦役を仕切り、さて次は日露」という段で、日清戦争対応の過労が祟り急逝。その報に接したロシア軍首脳が小躍りしたとのエピソードがあるほどの、惜しまれた逝去であった。

るのだが、其の先のことはここでの主題ではない[9]。

また、「周到な事前準備」の一環として、情報活動にも注力している。情報将校を配置するに留まらず、体調不調をおして自ら参謀将校を率いて仮想戦場の一つであったウラジオストクなどを踏査している。

更にその上で、「戦争をどう収めるか」が、進攻作戦と同じくらいの喫緊さで戦略想定された。先に、満州におけるロシア側の司令官クロポトキンが日本軍を内陸に誘導せんとする意図を持って画策をしたことに触れた。しかし、当時の参謀本部は冷静であった。奉天までは全力で当たるにせよ、そこまでが我が国の補給（ロジスティック）、軍事展開の限界であることを悟っていた。奉天で勝ちを収めたら、勢いに乗って露領内にむやみに侵攻することなく、即刻アメリカなどに調停を依頼して休戦に持ち込む算段をしている。そのあとは政治、外交の出番と達観している。まさにクラウゼヴィッツの戦争哲学そのものである[10]。

田村は、その余人をもって代えがたい資質と経験を生かして一身に陸軍操典の整備と運用の重荷を負ったが、体調の不調を訴え始めたのは参謀本部総務部長の頃である。短躯肥満（チャビー）気味の彼は、元々ドイツ在任の頃から、森林太郎に持病の脚気、心臓病の養生を言われていた。ただ、本人は至って楽観的で、自己の健康の維持・管理には無頓着であった。しかし、参謀本部におけるストレスの多い膨大なデスクワークに日夜勤（いそ）しむうち、心臓への負担から動脈瘤などの症状が顕著になってきた。歩行さえ不自由な中を、騙（だま）し騙（だま）しの療養を繰り返しながらも職務に邁進し、結果状況は悪化の一途を辿った。

そして、1903年（明治36年）10月、夫人の伝子らの家族、大山などの陸軍首脳に看取られて遂に帰らぬ人となった。享年51才。即刻、中将に補され、功4級勲2等を授与されている。日露開戦の前年であった。

この時期における対露作戦キーパーソンの喪失は深刻であった。大山参謀総長はじめ陸軍首脳はもとより、桂首相、小村外務大臣においてもその後任人事に苦悶した。田村の職責を継ぎ、いざ開戦となれば派遣軍総司令官に転出が予定されている大山の下で総参謀長の任務に当たれる人物となると候補者は限られる。その窮地を救ったのは児玉源太郎[11]であった。彼は陸軍大臣、文部大臣経験者で桂内閣で内務大臣（副総理格）であったが、格下げを甘受して敢然とその後を襲った。児玉も言わばクラウゼ

児玉源太郎像（近世名士写真より）

9) 旅順の攻防では、乃木軍の白兵攻撃により日本軍は多大な犠牲を出したが、日清戦争において1日で陥落させたという経緯もあって、その後ロシア軍が全山をベトンで固め要塞化したことに無頓着であったのがその原因であった。その意味では、田村の事前の構想が完璧であったというのは極論であるし、急に投入された乃木以下に責任の全てを帰すのはフェアではない。一方、多数の損失を出しながらも、むしろその故に旅順を陥（お）とした乃木第三軍の働きは、ロシア側からは畏怖の念で捉えられていた。奉天の一大決戦において、露兵が鬼神と慄（おのの）く乃木軍への対応のため、クロポトキンは過大な兵力を割かざるを得ず、元来優勢のはずの露軍の戦線バランスを著しく失ったことが、まさかの退却を余儀なくされた一因であったということを記しておくのは、フェアであろう。

10) 論旨を混乱させないよう注書きに留めるが、田村がまだ存命中の明治36年1月に陸軍は「守勢大作戦計画」なる計画を策定している。日本海における制海権の如何によっては、本土防衛に主軸を移すこともあるべしとの前提での計画である。弱気というより、冷静なコンティンジェンシーである。現に伊藤博文などが日露協商の可能性を並行して探求するなどした頃であり、その直後の日英同盟成立によって事態が大きく変わる前の政策当事者の苦闘が伺える。

11) 児玉源太郎は、前線指揮官も参謀もできるオールラウンドプレーヤーとして当時の陸軍において特別の存在であったが、併せて行政官的センスに溢れた卓抜した業績を上げている。それは、のちに台湾総督となり、それまで必ずしも良好とは言いがたかった台湾治政の立て直しに如実に発揮されるのであるが、日清戦争後の処置においても忘れてはいけない立派な治績を残している。児玉は、大陸において多くの兵士が伝染病に倒れ、その数がはるかに戦死者を上回っていることを深く憂慮した。その伝染病が外征兵により国内に持ち込まれるのを危惧し、外征軍23万人全員についてこれを上陸足止めし、意気上がる凱旋将軍の猛反対をものともせず、帰国上陸前の検疫・消毒を完璧に行ったのである。昨今の類似事情を思うにつけ、その見識と実行力に頭の下がる思いがする。
　なお、日清戦争、そしてその後の日露戦争において外征兵士の間で猖獗（しょうけつ）を極めた脚気（かっけ）の原因について、所謂「脚気論争」という議論が陸海軍の軍医を含めて展開された。そこに森林太郎軍医総監の名も登場するのであるが、本稿の趣旨ではないので、これ以上は触れない。

ヴィッツ思考の体現者のひとりであり、戦争を指揮しながら、その終結までの段取りを常に見据えた人物であった。この時期において、そうした人物を得たことの意義は限りなく大きい。国として僥倖（ラッキー）と言うべきであろう。児玉は奉天での勝利を得るや早々に戦線の収束を図り、外交交渉への道筋を模索した[12]。

「日露戦史」という日露戦役の参謀本部編纂の公式報告書がある。司馬遼太郎に言わせると「長いけれど、どうにも読み込み甲斐のない資料[13]」ということである。戦勝の将軍らは自らの功績を最大限盛り込むように編纂者に強く求めた（圧力をかけた）。それにすべて応じていると戦況の推移描写に辻褄が合わなくなるから、勢いその記述は時期と兵員の動員事実だけのものにならざるを得なかった。そこには作戦の狙い、その後の戦況推移と結果評価など、戦略的な立場からの描写が入る余地はなかった。それでも、いや寧ろそのゆえに、関係者からの評判は芳しくなく、編纂者の某大佐はその後閑職に追いやられたと伝えられる。田村はと言えば、その絶大な功績にかかわらず、早い逝去により称賛の対象としては存在感を出しづらい代表例の一人であった。凱旋した将軍諸侯の事蹟記述の中に埋没させられた嫌いがある。また、日清戦争時に参謀副長として仕えた山縣有朋との用兵をめぐる確執や長州閥との折り合いの悪さも災いしたという説もある[14]。

田村は心身を擦（す）り減らし、精魂傾けて陸軍的な勝利のための処方箋を書いた。どこまでが陸軍の責任か、そのために何をすべきかについて、留学、赴任を含めた見識に基づきクラウゼヴィッツの戦略論に即して最大限の知力を振り絞った。川上操六の後継者として自他ともに認める参謀の権化（けしん）として奮闘した。処方箋を書いた戦闘の実際の時に当事者が既に亡くなっているからといって、また前線の指揮官ではなかったからといって、それ故に戦後の評価が受けにくいというのはいかにも切ない。しかし、自らの責任範囲で最善を尽くし、あとは政治全体の判断に委ねるという姿勢は、彼の後を襲った児玉源太郎において全（まっと）うされている。けだし、天晴れというべきであろう。国としての総力戦の限界を知る者同士の阿吽（あうん）の呼吸で、初戦の勝利に奢（おご）らず、主戦論の世論に阿（おも）ねることなく、寧ろ初戦の勝利を最大限の交渉材料にして戦争終結を急いだ児玉の業績は大きい。その意味で、児玉と田村とは設計思想を共有した戦争設計責任者として二人三脚、いや一身（心）同体であった。

田村家46代当主田村弘正氏と（氏の山梨県笛吹市一宮のご自宅にて：弘正氏には色々お話を伺い、資料も頂戴した。氏の長女かおる氏には最寄り駅まで送っていただくなど、ご両所にはお手数をおかけした。誌面を借りてお礼申し上げたい。背景に写る白い建物は、倉であったものを氏が田村家の事蹟を紹介するミュージアムとして整備中のもの。 因みに、勘当が解かれて田村姓に復帰した怡与造は43代目当主である。）

12) 時系列で言うと、日本海海戦は奉天会戦の後である。その嚇々（かくかく）たる大勝をもってしても、講和ではついに南樺太の割譲だけで妥協せざるをなかった。それが当時の彼我の国力の実情であった。

13) この資料の記述は、平板にして無味乾燥な数字の羅列が多いが、司馬は巻末に添付された時系列の戦況図だけは大絶賛している。その図を連続的に眺めていると、作戦の意図が分かるし、経過、結果についても雄弁なメッセージが浮かぶとしている。

14) 今秋竣工予定の田村弘正氏のミュージアムは、その入って正面に氏は参謀本部にあったとされる「故参謀本部次長田村怡与造之像」の台座（像は未発見）を置くことを計画しておられる。その碑銘には山縣有朋が有志として名を刻んでおり、用兵では対立したものの、田村の業績には一目も二目も置いていた山縣の気持ちが表れている。

中尾神社ミュージアム（山梨県笛吹市）